

About Governor OKUDA Hachiji

森山, 英明
元奥田知事秘書

<https://doi.org/10.15017/4372247>

出版情報 : 奥田八二日記研究会会報. 6, pp.357-370, 2021-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文
書館内)

バージョン :

権利関係 :

【資料】

秘書が見た奥田知事

森山 英明

1 4選不出馬発言の周辺

毎年暮れに、新聞各社は正月の紙面用に知事のインタビューをするのが恒例だった。1994年、いつものように各社の記者はそれぞれに知事室へ招き入れられた。淡々と取材は進められた。最後に地元紙のキャップが呼びこまれたという。たまたま廊下でインタビューから出てきたのに出くわした。いつもと違った興奮が読み取れた。先ほど知事は「4選目の選挙には出ない」と明言したというのだ。すぐに知事に面会を求め、どういふつもりか質した。当時、重要事項は社民党県議団の林武彦団長との協議の上進められていたのは周知の事実だった。1年半後に迫った知事選の候補は県政の最重要事項であったことは言うまでも無い。そして関係者はまだ模索の段階だった。

△ △ △ △

巷では奥田氏は優柔不断とそしられ、リーダーシップが無いなどと県議会で野党議員からいつも攻め立てられていた。しかし、彼の政治手法はあえてトップダウンをとらないことにあった。著書の中でもボトムアップを主張し、職員や県民が自ら総立ちをして、福岡県を盛り上げていこうというのである。こうも言っていた。「知事はオーケストラの指揮者にも似て、それぞれのパートの演奏者が最大の力を発揮できるように心がけることだ」。

第1期の初めごろ知事のスケジュールを担当していたが、ある日突然に今からの分はキャンセルにせよとの指示が来た。嘉徳福祉事務所で福祉係長が暴行を受けたと聞いて、即座に対応したのだ。これにより職員のモチベーションが一層高まったのは言うまでもない。これを貫いて12年を運営してきたことはもう立派なリーダーシップだ。

△ △ △ △

しかし、今思うとそうとばかりも言っておれないことも散見された。

国鉄民営化のあおりで甘木線の廃線が既定の事実であるかのように進められていた。庁内でも企画振興部長を始め、担当者も政治勢力もその路線で一致していた。正月、塚本甘木市長が自宅に年始に行きたいと申し込んでいた。4日、仕事始めの式のあと知事に呼ばれ、甘木地区労は甘木線にどのような対応をしているか探れと命ぜられた。早速、地区労事務局長に電話をした。局長は「署名運動はもとより、半年間有効の通勤定期券購入運動までも展開し、存続運動を迫力あるものに行っている」という。数字は忘れたが、かなりの勤労

者がすでに購入しているという。その後庁議で存続を決定し、甘木線は朝倉市をはじめ自治体住民が株主となって、現在も黒字運営がなされている。

そして、この4選不出馬発言だ。後に奥田氏自身から当時のことを聞いた。「知事という権力には継続することで、築きあげられたシステムがある。それによって恩恵を受けている人もあろう。手馴れた運営で省エネでもあるかもしれない。しかし、世の中変わっていくのだ。自分の母体だった『県民の会』はとうに破産していた。その中核だった『県総評』も解散し、労働団体は『連合』へ舵を切っていたからだ。そして、物事は「深まれば稔る、慣れれば腐る」というが、権力はどうしても後者になると判断したようだ。亀井知事の4期16年は確かにそのことが言えた。(筆者は一九八三年七月から四年間、秘書室勤務)

この原稿は福岡県職員労働組合の機関紙「那の津」の求めに応じて、執筆した。この時期麻生渡知事の5選が取りざたされていて、奥田知事の4選不出馬の周辺事情を身近にいたものとして書き残した。

2 対話行政

「イヨウー、久しぶりね。今はどこ？」

「ここでイベントをやっています」

「そろそろ、課長ですか」

「同期はなっています」

先だってアクロスでS君に出会った。現役時代に一緒に職場になったことは無い。確か彼らは奥田県政になって最初に辞令を交付された新規採用者だ。当時燃えるものがあつた。しかし、1年後全員福祉事務所勤務の内示を受けた。「上級職だろうと現場を経験しないといい行政はできない」というのが知事の発想だった。「本庁で企画などの重要な(?)仕事こそわが県庁に入った意味だ」と誇らしげに語るものもいた。なかには密かに泣いているものもいるという話も伝わってきた。知事は発令の前に彼らを特別会議室に呼んだ。そして、若い内に出先事務所で仕事をするという意味を丁寧に説いた。その後しばらくは新採後2年は本庁以外での勤務というルールが続いたように思う。もっとも不安定な気分の人に直接語りかけるのが奥田知事の得意技でもあつた。

「奥田県政の対話行政」は県政の柱の一つだ。対話は庁内はもとより、県内どこへでも誰とでも自然に行われた。広報課が所管をして行われた「対話」は実に124回にも上る。

当時は県内に村が8あつた。自然は豊かだったが、経済成長の陽は当たっていなかった。また、前知事「陽の当たる県政」の置き去りを受けていたところでもあつた。筆者は当時の矢部村での対話に随行した。「鯛生金山に抜ける道で大分県に入ると立派な2車線道なの

に県内は離合もできない。早く改善してほしい」など地元の切実な声に耳を傾けていた。早速帰りに鯛生金山を回った。確かに実態は理不尽ですらあった。いまの「杣の里」経路で簡易舗装の山道を大分県に入ると、いわれるとおりの本格舗装道に変わった。

数日後、知事室に土木部長が呼ばれた。改善を検討するよう指示された土木部長が応えたことを今でもしっかり覚えている。「確かに早急に改善の余地があります。しかし、私どもは全県的な改善計画に基づいて施行しており、財源の配分も行っております。知事が喫緊の課題と思われるのであれば、財源を自ら確保してください」。なにやら政権の変わったいま、国段階での官僚とのやり取りもこうではないかと推測している。

大牟田市のある集落での収穫祭のイベントに呼ばれた。そこでは消えかかっている昔ながらの農村での技術が披露されていた。鎌を研いだり、わらじを作ったり、杵での餅つきもあった。珍しいもので、老人たちの晴れ舞台でもあり、子供たちは不器用に体験もしていた。知事がそこへ割ってはいり三つ揃いの背広を脱ぎ、腕まくりして、わらじを編み始める。その輪の中でそれまでの喧騒が止まる。しばらく声を出すものがない。ただ人の輪だけは広がった。知事にしてみれば子供の頃から、勉強は禁じられつつ、鍛えられた農作業の技だったのに過ぎない。

奥田知事にとって対話は意見を聞いてそれを県政に反映するという以上に、それぞれの県民や職員にとってのモチベーションを高めることにあったに違いない。その際、対話の相手との目線が同じレベルにあった。したがって、違う立場の自意識をもつ人々とは当初からうまく間合いが取れなかった。

70歳になり、これまでの資料を整理していたら、ある抗議文が出てきた。83年5月とある県政記者クラブから、県庁内で毎週火曜日に行われる記者会見で「新聞もうそを書く」と発言したことに対するものだ。広報課長経由で来たものだが、当時取り扱いに困って私蔵していたものだ。うそを書くといわれたら、「事実報道」を標榜するマスコミにとって生命線に関する問題であろう。

この件を聞いたら次の様ないきさつだった。選挙終盤お寺回りをする奥田候補と写真付で報道されたことがあった。奥田候補の兄と幸夫人のであった。関係者でも別々に会うと殆ど間違ふほどの兄弟は似ていた。烏打帽子をかぶって着物姿の婦人と手に手をとって寺街を歩いている男性が選挙終盤に候補者であるはずが無い。どうしたことか、これが全国紙に掲載された。明らかに虚偽報道だった。これが会見の場で件の発言となった。本人にしてみれば「すべての新聞がうそを書いているという積りはないが、例えばりんご箱で送られてきた中に数個腐ったのがあれば、『これは腐っている』とはいわないかい」と澄ましたものである。

すれ違いは議会である。知事の演壇の前に陣取った野党の1年生議員の野次(不規則発言)に腹を立て、「インク壺を投げつけてやりたい」などと日記に書く始末である。実行しなかったのは、夫人に「絨毯が汚れ、器物損壊になるからやめなさい」と諫められたから

のようだ。もっとも「相手が怪我するといけないから」という理由でないのがユニークといえはユニークだ。

財界とも当初は会話が成り立たなかった。正月は市内ホテルで賀詞交換会が毎年開催されるが、知事就任の翌年いわゆるゼネコンで組織する「福岡県土木工業協会」の交換会に随行した。知事は形どおり壇上で挨拶は済ませたが、遠巻きに敬遠され、名刺を持って交換するものはほとんどいない。出席していた土木部や建築部の部課長へは例年通りなのだろうが多数が賀詞を交換していた。

対話は双方向ではある。相手の立場に立ってはじめて有意義なものになる。生涯を庶民的というよりも貧乏の中で過ごしてきた奥田氏にしてみれば権力的であったり、金権的に染まってきた人との間には周波数が合わなかった。そういう人々の中では居心地が悪かったに違いない。ただ、例外はある。社会主義者にしてはどうしたことか皇室との対話は殊のほかスムーズであったようだ。また、亡くなる前には権力の権化と目していた後藤田正晴氏（元警察庁長官・官房長官）と会いたがっていた。これらは機会があれば別項で述べたい。

3 豪華知事公舎

82年3月二人の記者が本庁支部を訪ねてきた。彼らは県職労本庁支部機関紙「うずしお」（1422号）を手にしていて、約半年前に発行したものだ。記者たちは「もっとすごいよ 白銀御殿」というタイトルを示しながら、詳しく話を聞かせてほしいという。「白銀御殿」とは「うずしお」がかってに命名した新しい知事公舎のことだ。ここは県立の養護学校があったところだ。手狭になったとして、筑紫野市へ移転したが、不便になると反対運動もあったものの、押し切られている日く付きの土地でもある。なかでも記者が興味を示したのは当時の「知事夫婦が建設現場にやってきては注文をつけ、その度ごとに設計変更をさせられた」という下りである。

設計変更についてはこちらも伝聞で、確たる証拠があって書いたわけではない。情報の提供者は建築部会役員の T 氏だった。職場に連絡したがその日は風邪を引いて休んでいるという。記者はそれで帰るかと思ったが、本人とコンタクトしたいと粘る。後で聞いたことだが、丹前姿で二人を招じ入れたところ、数時間にわたって取材を受けたという。その話を聞いて、元新聞記者であった当時の本庁支部書記長石蔵精氏と翌日の紙面の扱いを楽しみにした。ところが翌日はおろか一週間たってもそれは記事にならなかった。

82年のゴールデンウィークが終わって、期待も薄れた頃になって、全国紙のトップに「豪華知事公舎」の記事がおどった。「総費用は5億6千万円」「1万5千人の分県民税分」「スリッパ1足1万円」など、その内容は豊富で、われわれのまったく察知していない分野に

まで及んでいた。

後年、件(くだん)の記者に会った折に聞いたところによると、本庁支部での取材後数週間にわたって極秘に取材を重ね、設計図はおろか物品購入リストまで手に入れ、連日徹夜状態で分析し、「知事公舎」の全容を知ったという。

しばらくは朝日新聞の独走が続いた。しかし、「新聞の悪いクセで、特ダネが出ると他の新聞は小さく扱うか、無視する傾向がある」し、「各家庭では一つの新聞しかとらないのだから」他紙の読者は知らないままに置いてきぼりされてしまう(岩崎隆次郎「逆転」読売新聞社)。そういう判断があったのだろう、県総評の米倉毅行事務局長(県職労出身)が来て、「何か運動につなげたい」という。すぐに、議論になったのは「リコール」運動だ。これは土屋知事時代に経験している。だが、これには厳密な資格審査があり、もし署名に失敗するとリアクションが大きいなどの危惧もあった。そこで「監査請求署名」が提起されることになった。それでも「地区労」(当時の地区の労働組合センター)の中には時期尚早というところもあり、運動体としては必ずしも一致していたわけではない。ともかくも「監査請求」は82年7月1日から8月30日までと決められ、運動化していった。我々も割り当てられた地区をつぶして歩くことで、この年の暑い夏を過ごした。署名には主婦を中心に熱心に応じてくれた。『自分も運動に加わりたいがどうしたらよいか』と尋ねられ、これまで組合運動しかしたことのない者にとって新鮮な驚きだった。そして運動のプロセスが毎日マスコミ各社の報道の記事になった。こうして署名は実に71万8千4百6にもものぼった。

そのころ知事候補者選考の世話役だった奥田八二九州大教授はロンドンに行っていた。帰国後、本庁支部の秋の学習会の講師に来て、終了後の雑談で「君、候補の選考はどうなっているの?」と聞かれたのには驚いた。「こっちが聞きたいくらいです」とは言わなかった。この後選挙体制や政策協議や候補者選定が本格化していく。

豪華と騒ぎ、5億6千万円(当時)の巨費を投じた割には、今にして思うときほどと思うこともある。数年後、役場でピストルで撃たれた大任町長の自宅での通夜にいった折、「こちらは一代で築いたと言うが、知事公舎は足元にも及ばないね」と奥田知事は感想をもらっていた。あれから、30年。豪華さのひとつに、銅板を張ったといわれていた軒には赤錆(?)が浮いているとも言う。

「うずしお」の記事の終わりにはこう締めくくってあった。

知事公舎で作業中の、おばさんの次の言葉にわずかに慰められた。「知事さんもこげん立派なもんつくらっしゃても、あと何年入っとくつもりでっしょうかね。(原文のまま)

それから1年半後の83年4月、亀井知事はこの公舎を去った。

知事になった奥田氏は当然のことながら、この公舎には入居しなかった。

参考文献：

岩崎隆次郎 「逆転」読売新聞社
「我、公舎に入居せず」朝日新聞社
「うずしお」(1422号)

4 初当選と滑り出し（奥田日記から）

「知事室からのながめは今が一番美しいのかも知れない」。4月23日（土）の奥田日記は書き出している。「靴埋まるようなジュータンとは聞いていたが、それほどではない」と特有の茶目っ気も出している。前日の22日初登庁の印象なのだろう。

出ばなのお布施事件

しかし、これに合わせるかのように毎日新聞が写真つきで「奥田夫妻でお寺参り」と報じた。世にいう「お布施事件」の始まりである。これはまったくの誤報で写真に写っている男性は八二氏の兄の七二氏であった。初当選の抱負もなしに知事のマスコミ不信は高まりっぱなしだった。このあと29日には選挙対策本部の関係者やあろうことか奥田夫人まで逮捕された。マスコミにとって面白い材料であったろう。しかし、真実ではなかった。

夫人は政治的に有罪を認め、罰金20万円と公民権停止4年の判決を受け入れた。最近奥田夫人を訪ねた際にこの事件について聞く機会があった。「いろんな意味でこの事件があったからこそ3期12年も続いたのかも知れませんね」と水を向けると「そうね、貴重で得がたい体験でしたよ」と83歳の目をしょぼつかせていた。

ともあれ奥田県政はこうして始まった。

暴行事件

県内での不毛なマスコミのあおりは2つの不幸な事件へと発展する。ひとつは初県議会で記念写真撮影の際、暴漢にみぞおちに当身を食らわされた。念のために九州大学病院の診察を受けてもらったが、どうやら空手でいう「寸止め」だったらしい。それでも敵の効力は十分だったのかもしれない。議会棟から地下通路を通過して知事室に引揚げてくるときに、「あれが刃物だったら・・・」と声を震わせていた。2回目は田川で今度は車ごと暴漢に襲われる。件の暴漢が棍棒を振り上げて知事公用車に近づいてきたのを見て、随行の秘書が体当たりをかませ、公用車を急発進させた機転によって、あの頑丈な日産プレジデントが少しへこんだくらいで済んだ。議会の事件以来県警察のSPが不断に随行することになったが、このとき全く役に立たなかった。後に担当警備に聞いたら、腰につけている棍棒を抜こうとしたが、すぐに抜けずもたついてしまったのだそうだ。「近頃警備ということだから多数の警官がついているのがどうにも気がかりである。・・・田川の事件で県警本部長が警

察庁から大目玉を食らったから、むきになって警備強化を指令していると聞く。だが彼らは私の行動のなかで公安に関するさぐりを同時にやっているのではないかと思う(6月26日)。こんな事件があっても報道はお布施事件に比べて実に地味なものであった。

初議会

「こちらはワニの川に落ちた人間に等しく、あらゆる手段をつくしてワニから脱出せねばならない(5月19日)。臨時県議会のあとすでに議会との関係をこう書いている。7月7日からは代表質問、約1ヶ月にわたる苦行の日々がつづく。どうにか本会議をクリアし、特別委員会に入ったところで、初めての全国知事会に出席のため仙台に出張してもらった。だが、議会ではまた横紙破りが始まる。慣例では委員会への知事出席は保留質問になっていた。本人は土産に笹かまぼこを求めたり、視察日程を楽しみしていたが、条例特別委員会で副委員長が不在を知りながら呼び戻しを強要、会議を中途退席して「なんとも割り切れない日程になってしまった(7月20日)。理不尽に攻める野党、それをテレビニュースで見た県民は「奥田いじめ」とみたらしい。野党の代表者がこぼすのを聞いた。「あんまり攻めると俺たちの票が減るばい。家に帰ったらこっちが女房に責められる。」

福岡では連日はしゃぎたてるし、県議会野党も腹いせなのか控え室に挨拶に行っても、すっぱかしたり、顔を見て逃げ出す会派幹部もいた。その点中央政界は「清濁の政治の渦が巻いて人間の不可避なたたかひがある」、「自民党本部では二階堂幹事長が『奥田さん、今度は負けたよ』と大きな声で先方から握手を求めてくる」(4月27日)と選挙の結果はそれなりに評価していたこととの隔たりは大きい。

政権の交代は前任者時代の資料がもの見事に片付けられる。秘書室には特別会議室との間にかなりの広さの書庫がある。前知事在籍中はいろんな資料が収まっていたに違いない。6月1日一般職異動で着任したが、あったのは人事資料と例規集だけだった。資料が無いので知事のスケジュールの組み方も不案内なうえに、各部局からも知事の出席要請もこない。何かの間違いだろうか直接秘書室に届いた案内文書があった。福岡市東部農協の選果場落成式のである。本来なら農政部の担当課が出席して知事挨拶を代読するところだろうが、たまたま日程が空いていたので、知事自身が出席した。後日談だが「今度の知事は身が軽いね」と評判をとったそう。こうして、知事も事務方も手探りの中でこなれていた。

当選初期の奥田日記では、マスコミとの確執がかなりの部分を占める。機会があれば後日にしたい。

(日付はいずれも一九八三年)

5 少数与党

巖頭一樹松

「知事はもう少しうまく、対応してもらわなければ困りますよ」

1983年10月4日、奥田知事は、春吉の那珂川べりの料亭で開かれた社会党新人県議会議員との懇親会に出た。9月定例県議会で一般質問も終わり、本会議が休会に入る予定でセットされたのだが、議会日程がずれ、明日も本会議という、酒なぞ飲んでおれる日でもなかった。折角議員に当選した喜びもつかの間、当選後から続く『お布施事件』、マスコミの対応、少数与党として発言の機会も与えられず、たまりにたまった不満がここで爆発する。「知事を励ますと称する苦情集中の会」で、「細かい注文で、箸の上げ下ろしとさえいえる注文」ではあったようだ。「一波萬波」は色紙に多く書いたが、この日以後「観自在」も良くものにした。「皆さんの要望はいちいちごもっともと思うがそれを全部かなえるとホトケさまみたいな存在になるだろう。」ホトケはどこから見られても同じ顔でなければならない。知事という職も片方だけにいい顔はできない。それが「観自在」といいたいのだ。特に少数与党であってみればなおさらのことだ。しかし、「軸足は左で右足は自在に動かしてきた」とも語っていた。

この日、床の間にかけてあった軸は亭主の求めに応じて、奥田知事が就任後揮毫して贈ったものだった。「巖頭一樹松」。後に知事にその意味をきいた。滝の岩の上に生えている一本の松の木という意味だそうだ。まさにこの時期の奥田知事の心境だったろう。いまの菅総理も同じような想いかもしれないが、こちらは一応多数与党だ。

議会慣行無視

奥田知事と一緒に当選した議員は89名、うち与党といえるのは社会党、共産党の18名。自民党と無所属（当選後大半が自民党へ）で48名。単独で過半数なのである。それに公明党、緑政連、「ねじれ」なぞというなまはんかなものではない。初めての議会は当初から紛糾したことは言うまでもない。

まず、これまでの議会の慣行無視である。自民党代表質問者は「党を代表して『格調高く』、知事の政治姿勢について質問したい」と、一問一答を求めてきた。論点はお布施問題と知事公舎不入居だが、同じことを繰り返し質問し、挙句には副知事や教育委員長、県警本部長にまで及んでいる。質問している内に当の本人も混乱、初日は休会、翌日も休会のまま週明けの再開となった。その間、政党幹部のやり取り行われ、知事が「不親切な答弁があった」と陳謝することで、代表質問が続行することとなった。新知事が誕生した場合議会側は試すつもりだろうか、事前通告をしないで質問をしたがるものらしい。土台新しい首長が行政課題全般に精通することは不可能である。通常の議会運営でもあらかじめ質問要旨を示して、下調べをした上で効率よく答弁させたほうが、それなりに合理的である。

『格調高く』とはじめられた件の代表質問も日程を丸2日遅らせた割には、不規則発言が多く議事録削除の箇所が質問者分25、知事分17におよんでいる。知事の日記には40箇所程度とあったが、半分以上は質問者の不適切表現のための削除だった。

前知事時代もそうだったが、議会が本会議休会に入れば、知事は議会に呼ばれることは無かった。すったもんだの一般質問も終わって翌日、仙台市で開かれた全国知事会に初めて出席した。奥田知事は仙台名物の笹かまぼこを買ったり、翌日の視察旅行を楽しみにしていた。しかし、慣例無視は続く。日記には「福岡からの呼び戻しの電話で会議半ばにして帰福せざるを得ないというなんとも割り切れない日程」とぼやき、「自治事務次官の発言や討論も是非聞きたかった」と悔しさをにじませている。

7月議会は最終段階で「知事不信任決議案」も取りざたされた。与野党の折衝が続く。その合間に知事室で記者の雑談会をした。記者がこの決議案が可決されればどうするかと問うので、「議会解散」も含めて、可能性について冗談を交えて意見交換した。途中で入ってきた全国紙の記者がどう勘違いしたのか、「知事は解散を模索」とその日の夕刊のスクープ記事にした。記者たちには刷り上ったばかりの各社の新聞内容がもたらされる。それが一人歩きした。各社の記者は野党会派控え室に赴き、まだ配られていない夕刊の誤報を説明していたが、「議会解散」は当選したての元気の良い野党議員にとっていまや恐怖になった。もめにもめた7月議会は急速に終演に向かった。

きたえられた県職員

議会が少数与党ために、職員もなみなみならぬ苦労もした。質問事項の事前通告は復活したが、そのすり合わせがまた大変だった。質問とりのつもりで訪ねたら、何を質問したらいいかわからないという野党新人議員もいた。しばらくディスカッションしていると、「それで行こう」という。「それを原稿にしてくれ」と頼まれ、ついでに知事答弁も先に作ってしまう豪のものも現れた。なまじ詳しくない知事、多少わけの判らない野党議員、それらが交ぜになって、職員はそれなりに勉強し、鍛えられていった。不都合なばかりではない。

当初「3ヶ月は持ちこたえてほしい」と一途に願っていたが、少数与党の奥田県政は3期12年に及んだ。

(「 」内は概ね奥田日記からの引用)

6 生活保護適正化と職員対話

84年度 44.2% (952億円)

95年度 17.6% (656億円)

いきなり数字で恐縮だが、政令市を除く福岡県の生活保護率「パーミル＝（‰）」と保護費の総額の比較である。いうまでもなく 95 年度は奥田知事最後の年度である。就任の翌年が福岡県の保護率としてはひとつのピークになっている。

亀井知事時代県全体で 40‰を切ることはなかった。そこで「保護の適正化」と称して、当時福祉学会で打ち切り双六と揶揄された「保護の廃止までの手順書」まで作成し、無理な『適正化』を凶ろうとした。生活保護を取り巻く状況がそこまで至っていなかったし、福岡県職員労働組合の福祉職能協議会がこれに激しく抵抗、その手順書は沙汰止みに追い込まれている。（詳しくは 拙稿「被保護者層の生活問題」ジュリスト NO.572 有斐閣）

それが奥田県政 12 年の間に、率にして半分以下、金額でも 3 分の 2 まで減少した。85 年度からは年々低下していく。うち顕著なのは田川福祉事務所管内である。84 年度の率は実に 209‰、10 所帯のうち 2 所帯が生活保護所帯だった。これが 97 年度には 85‰と劇的に低下している。県が発行している「福岡県の生活保護」（平成 22 年度）には、この低下傾向に「平成景気」とコメントがしてある。確かに奥田知事自身も、後にこのことを問われたとき、経済学者らしく経済動向と応えていた。フェビアン協会の研究者で社会政策学者にして、炭鉱問題を実地で取り組んできた知事にとって、とりようによっては「福祉切捨て」ととられないかねないことから、自分の 12 年間の実績といたくもなかったようだ。だが、むしろ福祉職員の努力の結果として素直に認めていたようだ。

奥田知事は 84 年 12 月の福祉事務所長会議に出席、「やくざなどの不正受給は生活保護制度を危うくする」という認識を示した。生活保護制度は基本的人権の最後のよりどころであるが、どんなにいい制度でも長くなり、運用をルーズにするとそれに利権的要素がはびこるといふのだ。また、社会福祉には「自助」「共助」「公助」が組み合わされるべきで、「自助」努力に欠けることには批判的でもあった。余談だが「労働者の権利も不断の努力なしには守れるものではない。権利は与えられるのではなく、勝ち取るものだし、労働者がその権利に安住することがあってはならない」と組合の学習会のたびごとに聞かされたことを思い出す。

所長会議で指示する以前に福祉職能協議会と周到に話し合ったことは云うまでも無い。この会議の前に福祉職能協議会と「歴史的和解」（城島泰伸—当時福祉担当執行委員）をし、「大事な赤ちゃんを、洗ってやった後、たらいの水と一緒に捨てることのないように」と適正化にあたって慎重を期すことも要請している。

それでもトラブルは発生する。84 年末には田川福祉事務所での当時の係長が保護受給者に暴行を受けるという事件が起こった。事件発生の際にすぐさま当の係長に手紙を書き、「新聞を見て驚いた。議会中で今は動けないが」と前置きして、後日に現地に行くと言った。係長はその手紙を今も大切にしている。「先日の田川福祉事務所事件の背後にある職員の取り組みは良い見本だ」と、この年の 12 月 23 日の日記に書いてある。その後、筑豊の各福祉事務所をまわり、親しく職員と対話した。

『この体制が保持されるために、必要な福祉負担に応ずると同時に、自分たちの間に「甘え」の構造の蔓延を許さず、乱用を自戒する努力を怠ってはならない』（奥田八二「ニュー福岡元年」ぎょうせい 昭和61年）。この想いを福祉の職員と対話によって、共有した結果が冒頭の数字だと思うのである。

7 情報公開の真意

「内輪の常識 世間の非常識」。

よく言われることばである。広くは良くも悪くも社内文化とでも言おうか。組織は長く同じ体制でいくと必然の理で、内部のコミュニケーションの効率を上げる作用が働き、同じような思考に染め上げられてくる。それはその組織でしか通用しない言語で語られたり、外部からはうかがい知れない意思形成のプロセスになる。とりわけ密室での決定は自己中心的になる。奥田知事は自らの経験から「県民に開かれた県政」をスローガンにしていた。旧帝国陸軍の若い主計少尉は何よりも官僚的組織の真っ只中で終戦を迎える。言うまでもなく軍隊の中での常識は世間と隔絶していた。この想いが後に九州では初めてとなる「県情報公開条例」だった。そして「情報提供」と「情報公開」はいわば車の両輪であり、民主主義の前提だと考えていた。つまり県民と県行政が情報を共有することによって、共通の常識が形成される。

情報公開制度を作れば最初は珍しさも手伝ってなんでも請求があるかもしれないが、落ち着いてくるとそうでも無くなる。要はいつでも政策決定のプロセスを見ようと思えば見れるということが大事だという認識だった。「県民が情報をほしいと思う時システムが十分整備されていれば、請求を待つまでもなく、情報提供で県民の要求は満たされるでしょう」（1986年9月1日）。奥田流のたとえでは「議論している場の扉がいつでも開けられる。そういう場での議論は必然的に世間の常識的になる」というのだ。この条例の効果について十分検討したわけではないが、少なくともこの時代には県庁の汚職は一掃された。これまで1万3182件の情報公開の請求があった。

話は変わるが九州電力の「やらせ問題」は今に始まったことではなく、電気はもとより、知事をも作ってきたという文脈の中にあると思う。地域独占を有利に展開するために、この民間会社が各県の知事選挙に深くかかわってきたのは周知の事実である。それには地域独占での電気料金、いわば税外負担的に集めた資金を投入していたのである。地域的には誰も九州電力にクレームをつけられなくなった。そして、誰もが感じていたのはいまや九州電力という会社ほど官僚的のところはないことだ。驚いたことに「第3者委員会」の結

論を全く無視して、主務官庁に報告書を出してしまった。経営トップの責任論は数ヶ月の賃金カットでお茶を濁している。報道によると経営責任者は「社内外の誰も責任を取って辞任すべきとってこない」と嘯く始末である。最初の報告書はある意味「社内の常識」に沿ったものだったかもしれない。半ば公的組織であるにもかかわらず、株式会社ということから、自らの都合の良い情報しか流通させない組織になってしまっていたのだろう。

翻って県庁の組織も情報公開の趣旨にのっとり、県が保有する情報が県民の共有財産として尊重され、日々の政策決定には世間の常識からかけ離れないように心掛けてほしいものである。

8 護憲・平和への想い

「後藤田さんに連絡できるかね」。

アクロスの理事長室に出勤してきた奥田氏は何か思うことがあったのだろうか、いきなりこういった。「あの後藤田正晴さんですか」

1998年だったと思う。以前「お布施事件の差配をしたのは彼だ」と聞かされた記憶がある。何でという思いはあったが、淵上貞雄参議院議員の秘書を通じて後藤田事務所に連絡をつけた。「奥田先生が上京の際には、是非おいでください」と返事が来た。

後藤田氏と奥田知事の接点は93・94年全国的にゼネコン汚職が摘発され、知事クラスも逮捕者が出た頃と思う。そのとき後藤田氏から知事室に電話があった。「いくら探しても真っ白なのは福岡県だけだ」というのだ。余程うれしかったのか、松田初善氏（当時秘書室）にすぐに話している。その後どのような接点があったかは知らない。

奥田知事といえば根っからの護憲論者だ。知事に出る以前から「憲法を暮らしに生かすロー・フレンズの会」の立ち上げに参加、そこを拠点に活動していた。憲法集会から帰って日記には次のように書いている。「この憲法が日本国民に保障する基本的人権は人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であって、これらの権利は過去幾多の試練に堪え、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである」。「今の政府、自主憲法期成同盟（岸信介会長）は現職議員300人を擁し、憲法の骨抜き、改憲を策している…これらを駆除できない国民の歯がよいことよ」（『奥田日記』1982年5月3日）。5月3日は知事就任後も護憲の集会のスケジュールを取った。

だが、95年退任後の5月3日の憲法集会にはでなかった。他にスケジュールがはまった

ためでもあるが、「様子が変わってきた憲法記念日」と題して、日記に憲法への憂慮を記している。「メーデーもそうだが、憲法集会も護憲・改憲の双方に対し、はっきり区別しないという態度が労働団体や民主主義団体に現れてきた。…今年が敗戦50周年を迎えるわけで、戦争を知らない人が50歳になる。戦争のことなど議論する必要があるのかという人たちが圧倒的に多くなってきている」（『奥田日記』95年5月3日）。

こうした中で、がちがちの保守本流ながら、強烈な護憲派と危機感を共有し、語り合いたかったのかもしれない。後藤田氏の護憲論は老境に入って過激になっていく。

「60年間、ともかく日本は武装部隊によって外国人を殺した経験がない。また、外国の武力によって殺された経験もない。これは戦後、先進国の中では日本しかない。そういう意味で憲法の大きな役割を今後とも残す必要があると思う。ところがいまの改憲はそれと逆の方向ではないか」（『世界』2005年8月号）。完全に二人は共鳴していた。

しかし、奥田氏はこの本のことは知る由も無い。後藤田氏に連絡を入れてから程なくして、持病の糖尿病の悪化から済生会病院に入院、運の悪いことに院内で転倒、腰椎の圧迫骨折のために長患いをすることになる。上京するチャンスも訪れなかった。2001年1月21日、奥田八二氏は「多臓器不全」で死去していたからだ。享年82歳。

2013年1月21日は奥田知事の13回忌である。

9 県民総立ち

野草幽花各自香

（野草やひっそりと咲く花はそれぞれかぐわしい）

奥田葦水

1983年夏 奥田知事は舞扇1000本に自ら筆を入れ、お世話になった人に配った。表は炭鉱画家として知られる遠矢雅巳画伯が葦の絵を描いた。それは有名であろうと無名であろうと県民一人ひとりを大事にしたいという決意を表したものだ。

「革新県政奪還」それは「政権交代」の地方版でもあった。余談だが、このときに国から県に派遣されていた官僚たちは、村山政権誕生の際にそのノウハウをもてはやされたそう。

選挙時の公約をどう守るか。県民との約束である。おろそかには出来ない。象徴的な課題は「知事公舎問題」だった。今から考えるとある意味どうでもよいのかもしれないが、少数与党であってみればこの公約を守ることは就任当初困難を極めた。議会は審議拒否を

絡めてくるし、選挙運動体からは「公約は守れ」と要求書まで来た。奥田知事はその苦悩を日記の中に度々記している。ただ、公約の実現を迫る側からのプレッシャーにも運動と連動されないかぎり、県政運営上、実現は困難と腹をくくっていた。

ルーチンの行政課題は云うまでもなく継続性が求められた。これにしても、中央政界と業界団体などからの要求によって精密に組み上げられていて、新県政は利権としがらみがないがゆえに、改革のためには運動との連携が不可欠であった。

新たな運動の提唱が「県民総立ち」であった。県民のそれぞれの立ち位置で最善をもとめ、その運動を通して県施策をまとめるという発想である。その場合、知事自身県民目線であったし、職員にあってはそれまでもましてアンテナと具体化の役割が求められた。県民のより近くにいる一般職員の役割はとりわけ「各自香」なのである。こうして県民・職員・各種団体が相互に作用しあって、地味ではあったが12年間の奥田県政が続いた。

※『那の津』32、34～41号（2010年10月～2012年3月）より転載（原題は「奥田知事のこと」。本会報掲載にあたって誤字の修正等を行った。